



第 5 回

「婦人科の内診が怖い、苦手」という人へ。 乗り越えるために知っておきたいこと

先日、大学受験前の高校3年生がお母さんと一緒に外来を訪れました。「以前から、月経の時に腹痛、頭痛、吐き気などの症状がひどかった。中学生の頃からずっと我慢していて、大学受験もあるので、勇気をふりしぼって婦人科を受診した」とのことでした。できれば内診は避けたいとのことで、経腹超音波検査をしたところ、子宮内膜症の所見があったため低用量ピルを開始しました。お母さんは、「内診をしなければならないと思い婦人科受診に抵抗があったが、もっと早く連れてくればよかった」と話していました。

このように、他の科に比べると婦人科は受診しにくいのが事実です。「普段は人に見せないところを見られるのは恥ずかしい」、「どんなことをされるのか不安だし痛い検査はしたくない」、「プライベートなことを聞かれるのはイヤ」……など、受診を躊躇する理由はたくさんあります。婦人科では通常、性行為の経験がない方、特に小中学生などの若い方にいきなり内診を行うことはありませんが、それ以外の方でも、初診時に内診を受けることに抵抗がある場合は医師に伝えてみてください。医師は検査が必要であれば、その必要性をきちんと説明してくれるはず。まずは内診の代わりに、経腹超音波検査をしたり、症状や所見によっては、必要に応じてMRIや採血をする場合もあります。婦人科受診がどうしても怖いと思っている方は、まずは月経の悩みや子宮頸がんワクチンなどの相談などから受診するのもよいでしょう。医師との信頼関係ができた上で、検査の必要性を自分でしっかりと納得して内診を受ければ、余計な不安や恐怖も軽減できます。

もしも、あなたにつらい症状があるのに受診をためらっているのであれば、どうか少しでも勇気を出して、お近くの婦人科を訪ねてください。婦人科は決して怖いところではありません。あなたが抱えるつらい症状を和らげるために最大限の努力をします。女性特有の病気はもちろん、ホルモン変化などによる心身のちょっとした不調などに対応してくれるはず。また、症状がなくとも定期的な検診を受けることで将来の病気を予防することもできますし、不妊症、更年期障害、骨粗鬆症など、年代ごとの婦人科系の不調や病気を予防のための食事や運動のアドバイスがもらえるかもしれません。婦人科かかりつけ医は、あなた自身が、あなたらしく生き生きと前向きに人生を生きていく上で、きっと強い味方になってくれるはずです。

解説



婦人科診察の種類とわかる病気

内診（双合診）

子宮筋腫・卵巣腫瘍・子宮内膜症・骨盤内感染症など

視診

尖圭（せんけい）コンジローマ・性器ヘルペス・外陰炎・バルトリン腺腫瘍など

クスコ診（腔鏡診）

腔中隔・腔炎・子宮下垂や子宮脱・子宮頸管ポリープ・筋腫分娩など

細胞診

子宮頸部異形成・子宮頸がん・子宮内膜増殖症・子宮体がん、腔がんなど

腔分泌物採取

クラミジア感染症・淋菌感染症・トリコモナス腔炎・細菌性腔炎・カンジダ腔炎など

経腔超音波検査（経腔エコー検査）

卵巣嚢腫・卵巣癌・子宮内膜症・子宮内膜ポリープ・子宮筋腫・子宮体癌など



©Toru Hiraiwa

profile

成城木下病院
木下智恵先生

横浜市立大学医学部卒業。東京大学医学部産婦人科、順天堂大学医学部産婦人科勤務を経て2005年より現職。3人の子どもの母であり、気さくな人柄にファンも多い。

URL <https://kinohosp.com/>

自分のカラダを
知ることから
始めよう



私たちの 保健室

女性の心と身体に寄り添う、
産婦人科医・智恵先生のコラム。
自分らしく前向きに生きるための
ヒントを見つけてみませんか。

文＝木下智恵 イラスト＝竹井晴日

